岷江入楚

特別
ヘ 12
4604
38

小汀文庫

多方

五十歳　私鈴虫巻乃同秋より冬まへ乃事あり

大将念一条宮給事

一条に息所煩物氣移小野給事

大将退僧布施浄衣来れ小野二宮遊遊報事

八月廿日大将向小野訪に息所病事

押入宮に事給對面事

明日還六条院東御殿給事

大将も消息れ一条宮事

何関梨律師読ゆ大将事れに息所事

に息所古少将君問大将殿事　少将君陳答事

多方に息所与宮に物語事

大将与文れ一条宮に息所見給事　に息所遊に

大将殿後三条殿与雲井雁物読事

雲井雁奪れに息所に遊事

明日大将来出彼文れ席下見事

48 3707

大将依次日不出小野先を文す　大夫将監為使
一条以息取思煩宮以す　俄絶入す
自雲々訪一条宮行す
以葬送日大将出行又陶京す
九月十三日大将後小野行す
陶京之次通一条右之家前給す
陶三条之文又を文却小野す　宮通以返す
六条院図大将之一条之御中す
大将君東六条院之次同一条以息取御忌給す
以巻対云一条乃之次不のいこゝろかねんなれはしかと
ふかしまことせ乃あなるこゝなら世よしうあれとこゝ
柏木亜の繼さゝ年さりてことせ乃あるさとの給
一条之一稱住一条右之家す　大将召大和守俊付す
一条之稱徒す
大将住東對南西給す
三条殿人々雪以す　警歌す

大将暫住六条院花散里以方物語給す
大将陶三条殿雲井屋惣給す
雲井屋号以方遠後父大殿行す
大将後三条殿留ち取給す　次東大殿行す
大殿就消息却一条之家す　蔵人少将為使
藤門侍送文却雲井屋行す
放門侍雲井屋二人以服男女君達教す

夕霧　花巻名　以歌号　刻ニハ只霧トハカリ有之。箋

何　山さと乃あり連ぬさうふる夕霧に立ぬんさらも物きんなして

む　鈴虫巻ハ八月十五夜乃事にとしまり此巻ハ同廿日

よりみまて乃事見えたり源氏五十歳也

秘　源五十歳鈴虫ハ八月十五夜まさくなりけ里此巻ハ鈴虫

乃巻の末より十二月まさくなりけ里

事　源氏五十歳鈴虫巻乃末に秋より此巻ハ[illegible]

まさくなりあり

まめ人乃名をとりてさしぶり行大将
行 慶季 久選 又真人
秒 夕霧天法なる名をとりあへるをいへり
私さしり給大将とは夕霧乃柏木のうへなとをも
とさしまさもあり見たり
むしを忘れぬよがいろ見をつ
行 用意
柏木は遺言を忘れぬよし也
こやせ不をあらはれ有りこそ
秒 落葉宮乃母の息不也
たしかなりけさうだてを
秒 夕霧乃人中也
見たしなとさきしなふことは
秒 女二宮乃きこてあはすのなしと并
見ふことをもさにはりきこてしてきて
夕霧の心

小野といふまたりは山里をあへ給ひ
むし物語の手習巻にかけ夕霧の御息不おはせし山さと
よりいますこしいりて山にはうけるなるなるとも
山城国は小野里といふ不二あり宮治郎は小野
里あり又愛宕郎と小野あり此小野は鞍宕郎
の名不也ひ元乃山横川の名とよ聖といふ不也
秒 鞍馬に寄せりひ元の山乃麓惟喬乃兄との住あるる
不乃ありしなる也 箋
行 伊勢物語惟喬乃兄このしらおろしてとのふせこ給ふ
ほ乃物語千京の大臣たこうをうしなひて頼山さと
の人ほうけなりとの御うけあひてこのたりにひ元あ道
りしきこ極る不也
[illegible]
秒 行 浦恵 侍郎をひ入りけ義に及へてしさるん此平生海
依の人なる也
并 邪ともたとへさらしもよし 図

河恵心僧都 千日山籠間ニ安養尼所労ありけるかり
さりはまくなりあはれ對面ニ申り換此事を小
師ニ此敵坂本ニ今乃大原也
箋 律師雅拠恵心僧都 千日籠山ノ時ニ安養所労ある
私箋ニ用河海箋也
むかしのちかき趣なり乃君ならい
秘 柏木乃先弟をいへり弄
弄 弁乃君ハ只ふ心なきにしもあらて
秘 柏木のさしつきの弟ニ柏木乃遺言をしノ人也 和歌の
ぬしと弄
河 柏木権大納言会弟 紅梅右大臣也
歳人母時平公女 早世 天暦元年十一月十七日卒 年卅
清慎公 敦敏少将 父公頼斗 見坂撰まるしきゝ以人もありけるを本朝ニ云
右大臣 諡廉義 公母同敦敏
頼忠 天慶五年十二月十七日侍従 正年四月廿二日春宮亮九年
雅紅梅 兵衛佐 天暦二年正月廿日右少将十年三月十四日
弁少将 右大弁 右大臣 本朝 桐同ニ 箋用此義

同弁乃君ハ落葉家ヨリ 心をかけしも
ことはなるはもてなしありけるに志好てえまうて給ひを
弁君ハけし絶ありけさうな池てよ屋しまとのみ
よもてなきましハ志ありて見まいなともえし給ひと也
私秘ニハことのけるなりけりはもてなしまハ好ておうてもあ
れ給ひをとアリテ手探ニ伊勢物語ニ伊勢國にあていきて
あるんといひ是ハとアリ物ニとハまとなと云心なるへし事
のはなりてなりていと也天文廿一六八記ニ以上秘
私三家本ニ刻ニ乃こときた不変是本ハ挟ニ処別
箋物 尚追与三家本ニ大内ニ但此秘ノ箋ニ及
へりきたる事
この君ハいとしこうさりけなくて
秘 夕霧也弄
夕霧ハけさうしてなのはなるいたりしらも
さうのみぞしやうしやうしやう乃 河布施 浄衣
箋 此法なと乃時下ニ如志浄衣をきるも

なへそ乃ぜゞが紀に
○箋と乃世ゝ伊を出といふまゝ也
もしこれにしぬ爲る
夕雪ある居りにくき人なる爲し
云ふれかへりきこて給
秘女二二文に具ありかりてかきねふ也 乎
いよくこまほしう
秘夕雪の心
○箋 蔵葉ノ手結へく見たり
小方けしきそり給へる
秘雲籽の居也
乎雲力の居の推量しねれ也
見たるへしくて
秘夕雪の心也
八月中乃十日ハかりなきは
何横笛 鈴虫 同秋ん 奥入
○箋 鈴虫ハ八月十五ヶまさくさらる也 結に女ハ比乃平ん

平 禄園に祝せる乃ありなる爲しこゝ又云ふ中結ハ古ハかり成
下
山さと結ありさ海のゆうしけまい
夕雪小野を号居りねふ也
に歩こしくしくて
○箋 大物にあまるの色ふしを倍せるもうれを畧をれ
御也
松ゝさ紀のを山乃色
何 松濤山 山城国
を 松ハ濤にたえの山乃禁歩室乃ある所也
さるいかなる所と
○箋 ゆうき山なるねこもと也
秋乃けきけきうく
秘 けけしきつきて上云にくらきさきつきへしこれ
まてに居すうをいへり
○箋 四時不変の巌も秋のけきまもてやされる也

けりと人をもきこゆ
さかうう人を乃いふや
日いりくるまなり行り雲乃けしき也あり連まきりいたりて
山乃けはをぐらき心ちしきるは日くらし明さきりてうきほ
よ却ゆるなそしこ乃うちなりいける道もおしうる
此家集云孫左衛門といふ所
河内 かくらし乃帰法なるは日いく連ねとうふ山乃けはまさ
六拾 日ふらしのふ立もいとなくきこゆるは秋夕連まなる連いなりけり
日連のこやあり連とうん夕晩のなくなりけのひとなりしこ
日 あなたしとしきてしかひつ乃うきほすけ内ひとうれしこ
義 家乃こやあり連とうん し此外弦抄引 所なし
松乃ひきまゝ
義風乃名抄をかくしも抄也物は松乃聲也
ぶん乃縁よむ
義聲もし次月もなくよむ也
時ひいりそうひうちなる次り

時ゝうりくよむ也
義時じかいりそ 同時トキかり 又は時ジト云
たほ立もかりつるも
秋不断 縁時をひきくよむ也
いて給ん心ちもなし
秋夕雪也
アしうぢしるをとしそく
義 所乃加持は高聲なるも
いとく所しけよし給なりとく
こやせ不乃まつらひぬふ也
陀羅尼いとなりとく
義 先は千手陀羅尼なる所し
うなるは法とひそく
こやせ不乃ゆるも
しひ処りあまるもすいうさりけるは
熱海小野よ人すくなく海よ又こや不如何方へ無く蔵柴の所うんは人もまくなきこ

只ふことをもうちいてはあるき
夕雪乃心中なり
雪乃はしこの氷のもとまくく
秋 山さと乃さまもや　河 漢書に漢陽こうれて雪となるといへり
まうてんうしもみし頃
秋 夕雪乃頭 異
夕雪
山さとのあらまをうつる夕雪りたいそんくもなき心にして
秋 は弄巻乃名となまり夕雪乃弄は秀逸也
弄は弄を巻の名とをり
河 は雪より夕雪大将といへり
夕雪は衣ぬまねて菜まくたにのもとのあかね君推へ
雖愁夕霧埋人松只愛朝雲出馬鞍 山左 江相公
箋 夕雪は夕雪より外はなし
不及吳端 夕雪は衣はぬれて――――
同 おの詩をも門想夕雪は儒志にて和弄は達を
られぬもこれらの秀逸云々

山の花のまうきをこ先てたた花雪もあるなるへいてあす
秋 女二宮乃返弄心すらるるとは花のはいつるはいつる逢夕
雪乃うく返まし き心乃あ里けるをいつりさやりの人を
はいとせしれも弄 同
箋 はすり心をとめるらん人なるは雪乃まきにて也とも
はるをまらいてんさいもなきとおるいつるさをいとる人也
まんさいなるへ人をいとゝめすとも
私は為長卿乃箋は心は弄しろしされども夕雪とて
さた俗屋うの心弄りされはえしめ乃長卿りはるへきん
但々
源とよう 俗さはすまはいてね
河 曹公と云人雲夢澤乃行て大雪は逸て左を逆矢をて好忠
山里乃雪のまきは
私注抄 門雪なし 又は長を不和尚 紹 曹載 也
中元なるはさうる
秋 夕雪同雪のまきは元をいつり

屋ゝ笹ぬふ　何逐やうフ日本紀

秘　追儺を却り屋ゝひとりいふことし箋

秘　追出しぬふとも

法きなき人にうるまゝこれ

秘　ゆゑ乃まゝりなるぬ方に法きなしとも私ヨリツクホモ十

キ身ト云ん　笠秘

箋　法きなき人か乗りまんまとう儺語へ逢とも

私好色につまくしうるぬ人にうるまゝりなしきともいへ

ゝるものの法きなきゆへうと云んめ事

うし比もむけり

秘　云乃仏心也

いさうるに純法心乃うちり

夕雪の夜又心中也

人をせは

秘　夕雪ちいそく人をせして乃ぬふ也

仏法かさ乃うゝかりうゝかりえゝる

河右近大史将監也　右を将監の叙爵したるも

私仏つきとは夕雪大近大将なるを云うゝ将監也か

うゝかりに叙爵也叙爵したる人をに大史と云也

けれしりうなら須ふつきす

弄ちりことも

ごしんなしとも

箋　護身　是も加持也

りのわらうる

律師乃居るすも

これかまさふるをよ

箋　雅さにあるまさふるへなとも

くるものさうちうん

箋　山城国愛宕郡之内小野に上賀茂領之栗柄

に下社領也　寛仁二宮符又宇治郡ニモ小野栗柄野あり

是ハ別也　箋曰小野に栗柄にならを初ハ艶ニ艶テ

野ト云字をうへるる成也　一説夕雪に在不七乗内也

栗栖野ト他不ノ事ヲ云設レル云々

花 河峯寄賀茂上下社ニ云々

上社賀茂ニ小野ニ大野ニ錦部ニ下社栗野ニ

蓑倉ニ上栗栖野ニ不審出雲ニ今東山城國愛宕郡

之内小野ニ上賀茂領之栗栖ニ下社領之寛仁二年十

一月廿五日陣定ニ有リ官符ヲ給ヒ給ヒ物ヲ

くるまの所さらしらくらんといふ以下之又宇治郡ニも小

野栗栖野ニ有リ給ヒ給ヒ物ヲ

河海乃ちり海不乃名同之

秘 未決のすゝくるまを野ニ勧修寺乃邊之藝河海ニ所在也

一説夕霧乃在不のなををを毛分家を決して小野といふ

つきてのぬへりと云々さきは花鳥ニ見えしく号さる毛疑也

異 一義云賀茂人の文書ニ賀茂ちくくるまを野ニいふ不あり

と云々大きさ心をうし東乃くるまを野にくゝ為へらす一説夕

霧乃在不のなををもしたり給ヒて小野といふ也つきて所在

なきいのぬふ也云々花鳥ニ宇治郡の小野栗栖野なりて

賀茂領ニ小野くるまを有リと為ニ不の小野く

ぬすと絶ハ不慶なきもや

図 くるす野ちくらゐをしく夕霧乃不をしらせしてなり

そのぬふと云々

私河海ニ処をのせられたり子見の脱ハ箋乃義をむ

用へし花鳥ニ小太祀寛仁二十一廿五陣定ノ事を

のせらぬ繁まして栗なし何畧之

あるやうなしと

石を物監ノ推量也

みちいとしてくしハまもハ

弄 夕霧詠

おさりの外ニ祥まらく

阿岡梨ハ律師なるを乃ぬふん

ことさしめ池くるうかり

秘 ミやす所にゐるへに出あるんもいてとも
にせうそこ義こしたるへり
秘 ミやすにあらはれ文へ乃にせうそこ
○義 夕雪の文へ人して にせうそこして 法につきていり
ふるを
私 夕雪乃をうそこ絶へきん
あきましうてとゝりうるよ
秘 にせうそこ法へし人之 弄 花鳥
あなるよもさすへきるなかけ遣
○義 かけ○こなるよあるなる風し
秘乃風うよ 何さすのいけ○乃すん
弄 あを乃さ風也
なきぬりりきこれと 弄 女二の狗
秘 さふう人之 弄 女二乃狗といふめ
かいりにてさふるん
秘 夕雪乃狗

ふやしうくまくさまはしものゝ
落葉乃心は先かとちつまぬるなにはしく持ちも
いと心うくまくしき
秘 夕雪の狗 花
に心ゆるされて
に心ゆるしなきりおしらたるすいあるしとも
あにくけ侍る号は
何 君こゝ心いチこよくふれとひとつもちらぬおよう遣けり
○義 用は川 弄 図日
いひしらぬにけしきの
秘 いふへきるなしとも 弄
さいに風とことまゝ
秘 外空いかちよしといきてさりしやさいへと絶ましとも
弄 世乃きこえよりぬさりいや
風をくりあえかゝる
義 元いしうち見るる神也

うらとけ行へ所まで乃
秘うらくの所第之弄やうの乃すい号しけさらすとも
風にと心にはうらふけりよの乃しき
け候の家氣詞乃法くき言語よのへかし
こゝ有りの所に法け人
箋こゝ大るこの物号しくぬあれ人きへすと云れにて
夕雪乃心中を号屋る」きやうなうきなしこゝ
うしもさなりて入るこの身乃ひのもちうき程
秘所格子をもさしてうるも
箋かうしなもあけなりて詞乃つき奇妙なる云乎
狂のうおりしさぬ
秘夕雪の詞
よつかぬまくしれくき
弄夕雪ノ語
秘好色乃為よつかぬ也陳子乃ふそなとあるもあるも

何ましもやすきほとの人とう
秘夕雪ノ詞人数なるぬ物しうさぬしきなくまり乃
あまれ身ありしうよまなくいへるも
えるんさしためとのまし
秘やうなれはまきも号のとあるしさぬしうるも
世中をあげよ松にしさぬ
秘柏木よなまきあへい世中を号ゆるぬそもなしとも
いしいふへきと
蔵楽文乃心
世をさりしうるこの
秘蔵楽乃所心也
めさましう
弄うたくしうたのしきも
うきこうるのつきを
秘蔵楽文ノ詞弄箋蔵楽乃柏木よりいふもと云也
うまをさしけまつけてもおさまけまきよいふ号なせと
いふうとも

かゝりゝしいなき心さしを
無理なりしなりしかしかしかしと
雰にもまた紀進須
○箋雰にふ進とも為し男さゝかなる志をかりしかし
こゝさゝ乃まゝも　故君也
秘　柏木本　弄　花鳥
通ましうこゝに於ほし　おとすなれ
秘　柏木に於ほりと於ほしとうらむるも
心乃うらにもうれい
秘　宮乃心也うれいに柏木也　よろにこゝあらりにうゝ　花夕雰の小方ハ柏木乃
弄　女宮心に柏木のまゝを学ぬふ花鳥　連枝なり
大殿なしのまゝ学
秘　致仕大臣也　夕雰もむこ
弄　致仕大臣ま
院にもいかに
秘　朱雀院也　弄

うらはらに思ふとも
実　夫ま乃なきま又蔵楽の心はかきまを人の与
さるんと口ゆしく於ほしそ也
こやも不の与り給はさるんも
弄　一向に与り給はさるんも法こえかましとも
屋らひぬふ乃ことなし
閑　又屋らひなりけり
すきましやこと有りけほり
秘　夕雰ノ詞
於さらに於ほし与ましよ
夕雰乃心さしのほとを向後於ほし与ましとも
かう於こう海しこさ海を
秘　向後於たるかにもてなし　行てかとも
りしこうすかし屋り(ゝ)と
弄　夕雰をすしてくりつと女宮乃たほしていも夕
きりぬ学ぬ行らんきりしきらぬ事くもしうたも

心はくいまへしとやうなとおぼしめすに初もしらぬ事
くいことらとりきてていかさや
しらぬあくと
秘 我心ならうし何ともしらぬゆとちとおぼしてつゆの心
箋 萩葉乃夕霧とうしころにとすうしやさうりとおぼして
ふるゝては朧郁布さゝに時ハ我心とも見えかきやしそれや
只といふ夕霧乃用捨うこもしらぬゆくといふふてゝては
朧郁布乃人間にはうころ乃夕霧にはかゝ心も五十年よ
我たしらぬゆくも向後朧郁布さしせしも見えぬ
おれしゃまうとや思ひ夕霧は突法なる也人まくれとし
まことをなうぬのは心
秘 まち人なま迷はし
まつのみつゝも
秘 夕霧乃自乃心也 乎
妙き原や野辺乃露まさりちつてゐる霧をまけきりも人き
秘 心は夜をとしらまう迷なすへ八重にゝ霧をてうろ忘なる迷と

箋 たて似出る時ハ萩乃露まね迷ひ来ハ八重たつ霧を
分んすよと雅懐をとりいてて萩葉へうれへしや
同 萩原の野べハ萩の露乃御も八重たつ霧そまけれ心乃くれ
衣に 行人事とはゞり又野辺の上に霧をも分ゆくも花の 野守
夕霧の衣ハぬ迷て書捨らしのすうも有にぬ君ゆく
らくあつりこと
ぬ迷ふぬハ萩原は世紛りしうそうて風を世紛らし
うらうといふとうして行
秘 うくいうむいしらへるまつしぬめへとうしや
河 世ともかよふぬ迷夜まなうぬはうて後乃うそ紛すうりける
箋 もうをしは霧も深さなんぬ迷衣しころうきあハ我のこころ
私 は西前をいう花色に夕霧まれハぬ迷しあこり
はには羽くつきるハいさしの今案有りぬ迷ふものつれ
ハは斉まけて只る萩原の野辺乃霧又八重に 霧など
波それを ぬるも拘されてくるよなりそんのうまちうやし
いせのふ心流ゝらといへり申有りなるやうも世の中

秘 小野乃雪を号屋り有へ函也 弄箋図

花 市野姑りのまゝ也

夜冬れきつゝかり

秘 花数里ゆゑ乃さゝく函ほしをきゐり

れまへよさいり行

源氏乃山家へ也

花 花ちる里乃山家也

りこよ山ふゑ

花 如二乃夫の山野へ山ふゑまいるまゐ也

秘 小聖つゝ弄

にいりよあさまし重し

花より蔵馬乃心之

りけく出り給さるんより

弄 うしなく須物見ふけしきにくゝ也

たゝなるぬかしにくゝ也

箋 花をり給えつれくにもこし里ゐふれとなくゝ見る

てそなるさゝ物しゐふ屋きとも又物りいふれなき世な

まはをのつゝきてあるを行ふ屋くてもあるんを

人ゝありしまゝまきてもしさなん

秘 何れなくゝやすれへ人乃何連りしを 弄

箋 指弥をゝやゝ須不へまつらくに人乃下せりしを 蔵馬の

心なるぬ弄又 更弄乃なきまゝをおくまつよく見ゐふ也

秘 屋ゝ乃山中れきゝゆる

秘 りやゝ所ゝ親はりくすゝ常乃なるひやされとこれ

ゝやゝ人乃口ゝりこさゝしさゝ函さ絶ゝせと物ほ也

也りし物るりに也

弄 さ乃ゝ兵橋なしのまゝ三口乃ゝ所りろゐいふりし良方

孫ゝけ勢也 三ゝ乃ゝのりろゐいふりしまつりしきけんとのまゝ

つむなりこゝ也 いゝ上弄

私弄りいつる先例ゝ及さるまゝ只常乃ゝしに心うし

ことしをありかゝり

夫るなともなきをゝいてゝ何のと物ほしていと人ゝ

用捨してゝさねとも

弄 人ゝなりにゝほのゝまゝ給ゝゝ山息不乃きゝ給ゝや又云

極くるさしき須乃ミなん
秘 夕雪の心座ゐるなし也 弄
同 心乃うるゝ也
速い乃けしきなる
法孫乃後物めきたる文まくなしとも又此程かよいつ
文乃孫まゐりたくけさうしたゐ此ゐ程東ゐ
のみなきけさうしたゐ也ゐ
同 宍 須まゐ 面里とゐ見てすと之めゐ
何ゐまゐ法けさく毛ゐるゝ
秘 夕雪乃恐さし乃切なるをいへり 弄
ゐるゐまた乃ミさこえていこ弄とりや
秘 いもせ乃ゐる之
見弄とりいとうくにくく乃親切ほとなくていなとよ
里いふなるへし一義前禁のゐるゐのゐ云心うふつけ
速とさしゐるゐるやりなるへし
弄 夕雪乃すき心なるゝ之

物扶ほえ給ひる
小息所まつるひのひさ之
あざりひとりさまりさく
河 律師なき此毛洛法河岡梨耶といふ也
大日如来(ダイニチヨライ)そうことし給ひしい
秘 律師乃自嘆之
あく雅ういさふ孫きやうなき)ここうさうまれ(と)いまてうら
河 悪並 興(興)盛迷纏ん
むこうはうい業障之河海あやまれり
秘 花鳥説可徳業障之
極はりもなるを
箋 号こめ毛なきこ
うよやこ乃大将い
秘 号こめ毛なくふといひ出しなふ也
まいりうよいねふうと
同 密道(密通)乃事也

いとあやしきまし
秘 仍息所乃詞　不寝なるよしこ
心ちのまさしにしかい
こやせ不のこてはもつらりしもしこ
大きいとまあやかに
秘 夕雪のまゝ 弄
人のうしゆ里あらんことにんあきすく
秘 省略こ
弄 へりこる心又 省略の心もあり
心抱らさねまいあらしと
心ゆらさねまをしたるまいあらしとうらいけしとも
律師たぬるのちり
こや次不のすへ少将君なよひくといはふこ
けさ乃仍ふこのけしき
さらけなきさ文乃 弥 実 まなきさ海をトヽ
官もほのまの給せつる

秘 ありのまゝはせと乃ぬいしまと
私ありのまゝはせしといれほしらるとみたらたしま
のぬへ御とに見てさらん給ふ事わをつきなき純乃奇
姑さいりし時のこまへ御事なるへきん号屋りなるし
あきましさ又元人ぞとといへなとのこまへるまこ也
物ものこまはく
秘 仍息不こ
こそまつるこいとくおしう
秘 如仍息不乃ほ海をこそまつるこ
さうじさしく
笑 達子もつそくなとよきやうはりをこ
とくもかくても
秘 こやせ不乃語こ 弄
何乃よういもなく
笑 ほの乃うらうけらる弥を云
心をようかはとこも

秘 ふやせ所をりぬへふよしを討をり

○箋 うつまいといふやせ所之 蔵葉へ内と云をしや

せうしことよせく

せうしことをくらへくけきやうまうしうるとも

なけいぬへ泊けしきをいきこていくく次

秘 ふやせ所けまは又なけきくぶへぬふよしをいしのこ

ふる之 異

蔵葉ハ又なけきそしてまろらしとも

されいよといとはいし色そく

秘 女宮の心之

このまはのこあら次

秘 柏木のまに毛心を法そしぬいし之 異

勇のおもいをり

先も柏木のまし

この人いうてもやまぐ

花 あ乃人いスきりをいふ之 秘 夕雰之

アいくいふかいなく人乃とりよりそく

花 弁乃君如号かけしまし之

秘 夕雰をいいのうまくも又いつなる人も心をかくる事乃

いてきくいといさしつい号なくさしぬふ之人のことく之 言之

○箋 夕雰よりも下乃人極へり又名のうけまつあいとなり

されい夕雰のまをすこしいねけしなくさしぬるこもあれと

うれもうあくしきまといねほせ之 同

弁 人乃とい人言之 実あらん之 ねほしなくさしぬ 上実まなきまと 若しく見けそ

私花鳥弁君をさしていへ 所見石家之又異 義ていく

ついかは成ぬるうき人の

秘 皇女なとい一人はたりそ見てぬふまい 色ましきに此夕

雰如まさへいてきていると

ねほしくしく

先し居して之又い 告しそ之

中乃ぬりこ先の戸あけあらそく

秘 閑居よりなりぬへり

秒 ゑやせ流乃に病悩のひまあるとも
弄 ゑやすれ乃ゑろしきと
也ゑすてしあけぬふ
落葉乃に也ゑ乃あくれ之
りこゝろ又に文あり
夕雪よりゑ
心しらぬ人しもとりいれく
夕きり落葉の日おもしも去るぬ人之
かわ君とくにふゑありこいふさ又見えしき屋
りたしきゑ落葉乃にんた
人しまとわけしよりに心もうしく
秒 夕雪ゑ悩んころにもあらゝとゑやせ不乃心のうちにはさゝ
柚海し殺くさてまちぬへ之図
弄 おほしよりゑゑやす不乃心之
○箋 此時夕雪おわしゝゑゆるさんとゑやせ不のまち
ぬへ御れなり

れきこえ行へ
秒 に返事をしぬへと之 弄
人乃に名をよき後りいいなを次人へ
弄 あるまをなき屋うまいいなをもとこさ海ゑるまし之
うこに心さ
ゑう
図云
庵心庵之
私よこさまにいいなをもの時に無別 已上弄
私は既無別条只よき海よいいなを次人と云ハアリ
ふうたくしきやうまきこゝろよいぬふく枕無しまくなるん
こゝろよりゑ 死
花 花ゑ夕雪の文おもしゝ乃まゑこゝろ乃まゑこゝろかくゑあまき
うへりゑうたくしくけんきんなれらやうまもくなし
こゝろ人ゑかよりゑ 絶いたしゑあまへらさ海なる文なるへし
れに真不ゑゑいてそしらをくこゝふ之
私あいなきあまりゑさ海といましも同道すなくゑ
人ゑつりていくあらんあまへらさ海なるへしと道すを
すゑぬふなりすて文乃やうゑ抱りしれたほしてゑや
次不のうちよせぬふるへし 弄 に返すなくあくこ

とこに元こさ強いて
鳥乃あし乃屋うなる文灯下にて見るべきこと
家院乃ひんしのうへ
秘花鄙里之
さてもなをくし乃山海屋
に直人のやうなるといふこ
図平人なとのやうなるといひ出し行ふこ
ひこうろ
川上ろかなり
さすがよみ元見ぐくもさまてり
夕霧りはいはらしめられて見すしてもらぬるこ
こし月はうろあるてりしさい
秘電牡屋の刻
夕霧乃こし月はうへくあなたらこ乃ぬふにんなくいる
里夕霧こそ電牡屋をあなたりぬへと
こいかくうるいしらぬへるはそうかく

◎箋夕霧乃上はしらしてて実めはなりて枯はしる氣色
はそうあて電牡屋にたかふれはいはしぬふこといふ
此ハ暫こ
私箋ノ義至極屋しされこもいさしの異事ありといふ物ハ惜
まにあらしと評こそ左ハ夕霧のうくうるしらる程
つるはそうあて電牡屋乃年月はうろあなつて
さいに心なくいなへかりといふ評 ほうやうにせしきさ通
て乃ぬへはと心えて絵下氣色はいうりていえすを
いいのうしうりをとそ評りといふこ恐めり
うりもしいそうにうもうもあるんよの法の事なり
秘夕霧之
◎箋夕霧乃直養之事如是理ハ雖弁こそよの事
ことに養道はられもいふまうとも
又あらしいし
◎箋我ことくなる人ハ類あるしとも弁

よろしうなりぬるをのこれ
○箋 夕霧は宮爵もなり乃ほり我いとうふ人也
くまふるなく
秘 人日とりをまもりたる心弄
○箋 別心なきぞいふ
物 わかぢしたる鳥乃せうやう乃物
何 鷹乃事也 小雄大雌雌鳥者雄鳥病といへり女
わづり男はまけたるよしとへるを
箋 兄鷹雄也 第鷹雌也
さるゝこゝなしき
夕霧乃我身乃事をのぬるを
かためにをしけるすや
雲井鳥の為にをしけきまゝにあらぬ也
あさたゝ中に我きいまさり
秘 あまさぬほこきゆにくもくれるこゝ一臣姫なきと也
くわきな乃なよりしまもりけんやうに

何 くや姫を竹丸乃義乃なりたるまゝん
韓非子
一説韓詩外傳に守株而伺兎とあるまゝん
水原云赫姫乃雲に乃ほ乃し時ゐてなしと前時に
姑さえていほまもりしまゝ也
秘 竹丸よりも守株事一般ん也
○箋 韓非子守株而伺兎
弄 竹丸乃心
花 竹丸乃花さなるや姫乃斗を古杪に出をりうれ夫婦
乃故斗にあらぬ事にあひなりす別になをたるぬ
へし
閑 竹丸乃事をひく相違之只男女乃せうしうすさし
せういうる所をいふ也
をれまといふれい
秘 愚痴乃心
弄 をれくしき心之愚心
をこほりさらん乃心にて

何誘ヲコツリ コシラフ　攄ヲコツル　箋

秘　ケ簡してと　弄

いとにほいうようらつとしいく

秘　電斗屋と

ゆりぬる人とうしや

秘　ゆりしら物しうと

箋　ゆうされしら義力うと電斗屋のくぬふと

弄　電斗屋廿二夕雪　廿七ヒ　夕雪十二電斗屋廿四時逐行

然いは年れ遠之　源氏廿一箋巻に生絵いは巻源氏又

十歳之夕雪廿なるへし　電斗屋廿二なるへし

まてゆりなるらし　絵ゆて

何のまてゆつきを人になるらいさて　俄に物をゆりえしるか

秘　ゆ稱てゆつきをとし　弄　箋　図

俄に物ほしいわい

秘　夕雪　何弄　何弄乃出来ぬるうと

図　弄乃何弄をうけていつり何まの物を見せるうれと

まろをいはるされ

図　いの見とりの紬なとのまゝや

よりしす物きこて出るしる

ゆうしたる人あるんとこそ　おとなとのまをあるりて結ぶ心

あるもや

見とり乃紬や名紬あるつゝりしまに

今も程あるはらいしらて電斗屋を夕雪と引へしそこそ

まゆんとて色く乃まいいいはるまやなと絵句こなるよ

里乃ゆふと

あいなる人乃ゆしあはる　何大夫乳母六位　宮世と云ふ

秘　女二宮のまをいふなる屋し　花

弄　女二宮のゆしあいと物しくと夕雪の絵なるゝ又はゆまあ

るましき事はもあらすとおほせと

大輔乃めのといふらし　此そして

秘　電斗屋のめのと六位をくせといひし人之弄

をめてもあるりとして

はゆまあるへき

弄秘　夕雪の心

さやうに

あるこ次

何来之 梗之　　○義 来之あさらさき須も来合也

秘 不来取之

弄 来心之

法連なくはとのこゝろぬれい

電打屑 他夕雪ん

まゝりしまゝく

何 人にあり人月乃なきに雪をきゝて里火に心屈を小町とり

同 川 比弄 不及比弄ん

私まゝなるのさゝく心ん

ひめ君い君ゝらに雪をゐされそく

電打屑乃ゐ也

いまゝ紀ゐふ風うまゝく

秘 夕雪出とゝしめくゝゆきたらやうましぬへる也

弄 夕雪りしゝゆきゝ強なるゝいまゝゆきのふけしきをし給也

もとゝんいも思ゐへらぬをゝ

夕雪乃文をあるゝらにもとめぬ所に小野の女と思ぬ也

文乃まゝを雪出給いて

弄 電打乃屑ノ心

しこりいくきこえん

小野へ乃弄之

ゝへ乃ゆゝ何まゝつありし

夕雪ノ詞

六条 にもえまいるましけまい

花ちる里をもえこゝろふましとゝ

ゆゝいをこが流しう

弄 電打屑乃心 雪月乃文をとりけゝ也

一夜乃浮山風ゝ

秘 宮と云まゝ下心にあり

一夜ゝし

詞 又将なやまう

○義 電打屑のあさけりくのゐふ也 小野乃山風をいきてな

てとあるを三条

上とあさけまて

一条 二条ようへて

やましこと乃ゐへと云心也 上乃詞に夕雪乃なやましくて

ミやまゐにいり

六条 流にもえまいるましとある家をしけらる詞也

むかしを

えうしてしらる文い 花萩里乃文と申ゐひしれ也

いてこ乃ひゝことな
秘 夕雪乃詞
世人りなきへ
秘 夕雪を世乃好色なきまなる乃ぬいさと之 弄
こ乃め原しらも
弄 人こそ夕雪にまゝ人なるをやうまのぬふと云ふんと之
夕きり乃詞之
日 くらし乃こゝまゝ北と乃きこく
図 これにて山中を一入学や御せ此事まなきし時らくし此
呼し事あり
いまなしてしにう
硯まに出りいぬへこもよへ乃文を見給ひ文云乃心ま
こうまぬさ海也
うう心えらしき
秘 山郎花乃弁あるを弄
花 こやまの道まり一歩にり此花をとりしんとあるを

一ゝのまを心ありて
蔵兼へいひかしまし心あるさいや進給と相ほすと之
いふりいなうさまきらいし
こやまの不乃道まのさ海を云
あるへかくしく
伝 あさまどりくしての心之
を あるくしれ云心まや
秘 心乃あるくしれさる心之 弄
箋与抄ノ分にあるくしさと云ゝ結ぶ元と圖へさ之
いてやまうるしうや
弄 雲野原を夕雪乃なるりし給しまし
図 雲野原の夕雪をあなほらりしくしぬふすと之
心屋にくらいみんも
秘 まいりてを對面なくていとも
図 蔵兼の心やまく進給ましきりとも
人もくのぬふ

秋ハ鳥ハ極内しきま乃みへミしけれハ坎日なまハ保志る也
く八日にもありけるを　何坎日并箋
花九坎日不下出行こ九　秋并保く見之
相よの人并をとう
并　いかにしていかなる人小野山のふもとにおほえまかりし乃跡
同川ろ他抄不行く
いとあはれにきこゆるなと　このはとる　秋　一夜乃枕の下之
秋　夕霧ノ文の詞
又并　秋乃野乃草乃しけきをわけしとより旅乃枕もむすひやはと
秋　実事なし之　并　分入しいかにし枕をむすひけん
ハかなかりしを也
私小野乃名乃草のしけきをいふしるしをもあり枕をむすひしを
いまさら也
あはれなるそこにさきるも
哀　身をなすさましけれと命に哀のうちを行末をまつ
しる心にかな

同
花となり後ちにこそ、きかはしてかはらぬをみちていふとも
さ秋とも夕へ霧の露に無常迷をもやと海まる
やとりもや
よへ乃流にいかやこよりもやとあり
秋　先夜まちかねたいかやこよせは露をはゆつきとも
無常迷は露たとるまし之并
そうきるにかひかやこよりと見えたる寺の海い村さて人よ　和泉式部
と集は鳥羽の寺も一夜いすれ居とたとり人の何よは
まくいてり一夜のとかゝいかやこよりにくて思ま海
いかねたとふかりまやこひなとりきすつよあるつゝ
ね心之
宮よいいと哉ほく
落葉への夕きちの文之
こまやりありしとこきるよう流しねとさそく
何駿（駮）足馬
花橘（うつし）の鞍は後勇ののりるよ
なとこ大将は後勇なとやし後ふ成也

一夜の大夫をう
秘 法ゝきのせうこういし人に 昇
よへより玄案院にさふらひて
夕雲乃少整へをそぬまゝ如さりを法そりまゝにいい
をしへぬふに
うしこにいよへを法連なく
小野のまゝに
のちのきこうをも
秘 こゝやも不のうこより文にくすこゝ乃給しなときこてやあ
らんすんとも 弄
いといしうなやこ行
こゝやも不乃物思へらたも
さうしこの心のうちい
秘 女二宮い何とも れほきぬ也 昇 笑 更まなけれいうしこも
如さろ事給ひて
くいこしう れほいくらを

弄 こゝや次不の心のうちを女二宮如心なり物へ思
連いよりも物をらしたゝ
藤紫のさ法に 如ゝ物法を見しぬふとあこアリ
物をのこ物ほしうふへりけられ
秘 心有も不乃心に夕雲ゆへに物号をしぬふへきとも
私物ほしとふこい柏木乃上に文夕雲のまゝに
いまさらに如つしきことをい
秘 こゝや次不乃宮より行ふ初 昇
物こすと物さなくらく
藤紫の心物さなく物いきるこの教訓に
こすなるぬ身なるを
こゝやも不乃我まをいふや
うなるさ法いうし方有もく
けほとまそくいや心分別に法をうられ心やもくやう
く号しとも
法ゝきの心をきてのなりけることく

秘 夕雰 詞畢

いさき物をんとそくのゐふ是三条家のゐいしこ

ゆとさんとをくて

秘 ゑりいさく極へなり

ゆしけよひきへそそくしきしの花のうこい

秘 襯氣をれしへしてたるこ

私 秘 葬送をへき出さらのうこん

俺もろよ物をれ

夕雰乃弥之

清心なき世のありさ海乃人のうへなるぬもいとなりしきなり

秘 殊勝の徳こ

ふろしうをこうり殺さ海よ

秘 これより夕雰の徳こ

笑夕雰の詞かわよのゐふ

美もさ出る程をへなるを

常ハ美を鏡まよいへりこれハ美かもえもしさよし

むかしろき詞之

おほしりしさ海これよおほくハ心をこれ

秘 大物のまれおほくハ心をしりあひきあハおほきも

弄 おほしりしさ海ハ所是不乃心中之

同 おほしりしさ海とこやも不乃あをこ乃ハ学出ゐ

私弄ノ義徳同し

花 たこやすれハ大物のゆまゆへいあくハ心もこれでたるく

成ゐつるこ女子の大物をつきまよ物いゐつるこ

いりよきこしさせゐふとるきこしさせ仍へき

秘 さあらう人こ

くらりもへ

美 りきと

きをしハりて匂まれいふきまもおほしも

かわよをしハりてせとも仍匂をきりて心うへし

なき人ことなるぬ所あ望さ海にくなんト須きる所し

返すの殺ねもとりなれハかわ君のトなるへし

まゐらせ給へるこゝにきこてさせ給りぬ
秘 先より夕雲へ申詞之
私 秘 此義如何たゞいまいなきへとことなるぬといふより夕雲
へ如何君の申詞之
弄 御ありさ海にくなんまゐらせ給ふ一世二家のまに又私云
なんにくゝ切てまゐらせ給へるとゝ夕雲のまをきこてさ
せ給ふと云義之 此義不用
きこてやうへきうこもなきを
弄 夕雲説
こつらも号のとゝ
夕雲乃我身のまゝ
の者ほしなけきしありさ海を
弄 こゝ中不の夕きりとの中のまを号歎きぬいしとも
秘 夕きりのまを号歎きぬいしとも
同 夕雲乃返すなとなりしを歎しとも
かこらきこてさすらさ海に

夕雲をうこらゝ申屋きまゝもあれともけふ心ゑれて
申たかゝるまやなといふ也
ぬけしまとつる御心らを
蒲柴乃御愁傷をうきりあるんとも
けはしやこはまとつる
夕雲ノ詞
きこてなくさぬふて
蒲柴きこてなくさぬゝせとも
こゝりいしをあらしと号法
秘 葬礼なり
こさう乃人々
夕雲の家領乃人々之
人々となともそひく
夕雲乃とゝいれ之
物屋ときこ屋とを
親子をあまりさうしまゐらせ乃としれ也

この川事なと又申しう
落葉乃事
くものほりては
川出事而作之
西乃なきしたる所にて家いかにしまゝす
行 延暦八年十二月皇太后崩天皇修避正殿御西廂
箋 川之 是国史ノ語之
食させし心まゝるはそれ
行 食させし心まゝなふものなるは帯はやまくうすあるへりける
手 川之
まとまりあさましきことを
夕霧の事などよへ迷ひ給ふほどにおほしなけきてあれとや
まもののうせめいしとおほし出ちゝ之
つらぬ世の川にはまさる座
秘 らやまも本乃服陰なといへり
け人乃行とは

夕きりの事之
このなる事乃おもわり
秘 異本のまち弄
かの心よあるへ迷ときあはい
るかな事を用心よ人乃とはなくさめなるに
私別本於て絶ん
しきものなるを之夕霧乃心
大ゑ乃たうをすへりしを
秘 葵上乃母之夕霧乃者なる事を当世のふ之弄
箋 夕霧の心葵上乃は母乃事之け一段いふるの悲歌なと哀
いも同人いせつましきものするよし流様を引て心一つ
ま当有之
ちし乃ものゝさしても当有つる陵ことりの世乃ちれは
おほやけくしき
箋 殺仕大臣ハ母乃春をも共りてあさいかりははえ心まこく
そいなき人とも
花おほやけくしきいつくしく通さましさるまゝ事とあなり

なして程女二家の様してこれらまを号てこれ
其所のまをさしてきくとやうくやこ号を居とこし
たりさて次の詞ようく様にいかなく見しまいて又ちかり
とあり夕雪の心緒居し
様つかなきに様しまいて　花夕雪の又をのへ出ふまと
にいえなと通して
秘行とをなれはまいおとろし　語之
うちよりきく
このになき名乃
秘唐名にいなきまし　花之
ゐしよりきく
秘とりもちて女二家をもてきへきとも
弄ひらすらちきりのまを号らしゐふ
小乃さのに号居りを　弄雲力居のまし　花
秘あらや出しきなきやかなしきの方のまし
さらしこいつらおほしんなるとも

弄女二家に様しそなたともこれも其所の又をとらへ不れて
うこちよりんとも
一夜ハりのにふこ
秘なきなつし出ほを野へとあはしこれも其所のに拖ほし
をとらへ不にくのあへり
○箋左に居其所の方に一夜ハりの宿をりりんのまと
夕雪の一夜のとらかいと通すまかきあへらをしまし
とり経乃ハ点ハりすかに
小野乃姉なる居し
山田乃ひこにを　川板
通こ北い様とをのかり
河穀穂黄　白氏文集
ゆれいかほなり
秘我心より愁をそうふる之　弄
弄人乃号にたよりあり
なをしに通こ海やかなるにうの方ちか

○箋毎人之
弄 私思ま遣れ乃ほにてにけ里我志はややうと人のふまそ（しけや）
のしゝのにゝ之を
○箋夕雪 羽
こ乃人をましく
○箋 女羽なり
その夜乃にゝてりさへ
秘 女羽の詞 妻
花 是ハ女羽君のにけへ之そ此のにゝてりハ夕雪ハ文乃ほす
乃をそうしまをこゝや此不乃心ようけゐいるをこゝ
此たゐしにまにを
秘 柏木遊去乃時もしは女三乃おほ此不を持して心に
らくしそましくたる之 ○箋 弄 閑
こ乃になけきをいまへにゝ之ゝ是のにけしき
秘 二義有りにまへといに息不とゝ夕雪乃りらいゝ元給し
まゝ之 又乃箋ハ女二乃乃にまゝ之こゝや此不なくなり

ゐへ御事之
○箋 此にけきハ故 こゝや此不のまゝ
弄 夕雪乃りらいゝしたるまをこゝや此不乃歌給しとや
女二乃ハ持ほし入ぬ之にまへにゝや此不ゝ 私不富アリ 以上弄
私此になけきハ右こゝや此不遊去るまゝへ女二乃の
まと見たりまゝ之のにけしきとゝ夕雪へ一とうり乃に
迎ゐ之なきたるに女羽のくゝ中之さそしは次の夕雪の
詞にくらくきこしたり
ひれのにけ之
河 夏ようなにゝ之見て後之四ま之見ま之ゝ之ゝ此のしけきに
箋 川 此方
うよやうを而まりまゝ持ほめしう 図 うりやうも ワモト 柿ヘニ イヘリ
弄 夕雪 秘さのこゝくまくなけきゐふましきまとや
此時ににまへといに女二乃乃心にくゝ紀ん之
私蔵紫乃見れのけしきにくゝかりすると女羽の中に
つきくゝ夕雪のくゝのゐふ之

いきしいきしけなくこそも
秘 今いくわ不なきは力なる色しとも
ひ山住をいとみき花に
秘 朱雀院之
よろ法のまさ法へきにこそ
夕寄りうらなひきぬへといふまをのぬふ之さて
きてきてをぬへとこうきせのなくひをれ之
まいいくるはまる連乃は心りつなて色へきまつい
弄 こゝや此家別乃まし
秘 世中心よつなよ物なるに柏木にまり小ぬふまは出まぬき
と之又いこゝや此家の別と之
私柏木乃まに及へらす先さしあらりてこゝや此家の
まはりて取結色しし
うらなけきは
秘 わわ君乃さ法也
ひ小せらめやとうく

何秋なきは山とよ秋まく吟きに我やうちや独ぬる夜い
弄 秘 箋 閑 引之
夕寄 さこなと小地の志の原分てきくひ小しきうち琴もおまる
秘 小野藤原さらい名家にあり此菓の原をいり箋
何 あさちの乃小野乃藤原といふを国の名家之小野と
小野乃志乃ひくともひふ之志けき心之
能宣集 山城乃をのゝ山への里とをこうりのやうをうちうる
私ま連も志ふくいさうさうこ寄ふ義之庶をこあらんと
夜 わわ君 秘 夜 夜 夕 紀 秋の山人い庶のなくぬに意をうへ法
秘 わわ君 弄
心あらハ之
よろうねと物りうるに
此 菓子地ん
いまいくあさましき夏の
秘 女二夏乃は返す 弄
うしぬはいふらひも

夕霧乃たしすといぬいしるや
十三日(ジウサンニチ)の月にとゝるやうりし
九月之日本ハ名月ハ月隠ん但ふるき集なとに見て
次に法比(比)より賞しるまにに
小倉の山もたゞるましう
河 秋乃月乃月の光しきよけまいとゝ雨の山もてめるなり
秋 川方に及ぶ生とうき不も色ましきとも
箕不及川方とゝ雨の山乃頼之晴きにとゝ
弄 川方不用小倉山もとゝうしとも 西方始とゝ山
を小倉山とゝるゝや始に西白水
国 けしにくしけ望之
いらくとおりしこめく
小格子のさ海之
大仙言おしにくあういなと
秋 柏木も

夕霧 うし人乃親せしいてぬ池乃にひとり宿より秋の月伊勢
河 坂橋に侍らせなりにし人乃家にまゐて
なき人の親さへこえぬ乃乃始さこは後をなしてけ
取りおりしてを
秋 三条殿之
さても見えるましう
秋 夕霧のさ海をいへり
うへハまゐやうに心こく
秋 雲ゐ房之
雲ゐ房始心
六条院乃一 六条院の人こをとをもれいめくこさ多めしに
弄 方こわまさ
なるゝなる
をと夕霧の
いきてる
よのねふ之
花 先も雲ゐ乃房心に号ゐまし
六条院乃所学人
うりいまを号あい始て初年こゝなりし始ハぬまを
夕霧の、ぬへれそれとくもあり法けしらまなるさ
あらめさるに夕きりをハまゐ人とゆくごろんなる所めやす
あやうわねにをられぬへり人のありて恥ゐきまやあんと歎き
なるゝ

あいくちなきぬよ　　同様ノなきこ

弄　雲ね厂を夕雰乃号殆をとりなしやと

人めえなれそ

さやらに有里法けらしい人乃見るめえそちつ面しろまし

きこなきまゆ乃いてきたる花に面目も色ましきとも

世乃たなしより

弄　ゆふまゆなきに中と人もいれしをとも

あへぬり

弄　あやより和にさ人もいれしこ

うぬきぐに

弄　一所よりしなりうぬきくてこ

いと心法きなし水

秘　雲升居こ

むひ殆かを

雲ね居もいまい其更に号法あくたりふ里のやう

いにしなし殆かねも

夕雰

いたさうハ和とろりをへき明夜乃美さあくとりいれしこと

秘　とにかくあさましき美乃世をさあにある羽をうけ所と

かんタきりの心にまちねふを美さあて　うとトよりり

弄　号三居まりてと女二家のゝねいしまを夕雰乃仍ねふを

美さあくとりとよりり

○箋下句ハ家乃に羽にかくあさましき美の世をそこしも

号さ海をかりあらはいてる事に一云と云心こ　其に約束の

に一云いに法と定めくまらもうへきうとも

うへよりかりとやかいねへらん

にいにていにようらん小路山乃うへよりかたる事なし此跡

秘　川号いにしてし　雲ね居乃くてなしねへる

○箋いにてよりん　くゝ乃ねふを雲ね居の中とりて

文乃円を推しねふこ

花　うたほの第三をこにりけりそのあらいたくさうもと

なのくにりをとい川をくて跡乃をとあ乃ゝ是あい

北にきこゆる所こ　しこ素をとなし川ハ紀伊国にあり

無言太子（ムゴンダイシ）そりこほうしたるのゝなしきまはしたる
秘河海に見えたり　無言乃行もこれより出たり
弄法師なと行はしたる無言のくるしきまゝ
河無言太子波羅奈王之太子其名休睍容弱正生而
十三年不言人不聞声諸臣婆羅門道士等誹謗他不
作城欲埋之時大臣伏其車前重悲此事太子云我得不言
生而欲埋将言怖入地獄自全身不害（宮）欲救魂脱苦謗我
不言者皆欲生聾盲干時国王吏人行迎太子云最
昔先身為国王以正道雖治国有所過墮地獄六万餘
歳苦難忍我怖地獄餘巻舌不言遂請出家父母聞之
許之入深山求道命終生兜率天　太子云尺寸国位之太子休睍（睍）絶
○箋は箋をのせ
又或往にうつくる鳥蛤をくらへて食とせんとするに不破
童子先をこそ云石にかくしけれ破へしとゝ鳥をし
へのまゝにしてく食とは太子を寵にかくて陸無尾のちに五子
とせしる無言太子これ之生れて十三年まそれいかを伝出に

うけまんとせるに太子乃いはく言當罪不言當咎とゝ
太子は尺迦如来之見妙（楽）婦人
よ紀ほとにいはそたもの（つ）へきまれ
○箋石一段想ふ乃女乃心用の本まなるまを明（アカ）せあり乃
哀をさしかも風流にとし又木石なるへきもたなし
けるに不及の誡之　秘中庸をいへ（ほこ）女乃一生を守りにて
をくらんまはありうきまるまと
といたる女一宮のはため之
○箋曰女一宮のはため之とあり処無言太子乃有まを
川用ゝ下心面白きこれ合之
女一宮今上第一乃皇女明石女御服紫上とりまきて
角しなひゆゑ之
大将君さいりゐへはいはいてありけく
久雪深夜のはるへ来る之
けしきも極りしけまい
久雪のやうらいを深乃ゆりしくおほしを
宮を不のいまをてゐるんな

秘勘
三ヶとせあまりの
或本三ヶとせの
ヶ久字をも
花なるも三年の
かよ尺ちとれり
柏木第三年と
河海一日不見女
三年之久とい
りの何を誤り
青表紙三十年
とあり也一説
ことあれ源氏と
年五十歳之
葵巻廿二歳時
朱雀院即位
有テ世ニ死ニト
シタル時分之
其比は四息不
もい死ぬ事を
ねをと志ぬ所
息所の事を実
労出し語也
これ世よりも
思ひ心と言
を青表紙ニ
然は世天久
十九十二九
清ニ事

秘源乃詞

きとせよりあなるは
秘柏木のうを語て三年と云 弄 箋 苑 為 関
1本三十とせとあり朱雀の御在位の時をさせりと云こ
抱ふへ乃ゆかるほとの物さほりよ
秘弟天か朝露貪名利の心にくく夕乃霧とりきなを見 弄
箋 川 は詞 弄 源氏 説
ざ毛乃とちなるやうにくも
秘けふ過あをとうちるなをいへり
よしとよ却しけるきんくよ
秘夕霧詞却しけなきんくよ
ほき世なるとも
夕霧乃答世の人なるを川てのぬふ
四十九日 秘かく乃こし
実なくなるとよむ
院もあをとふるはをぬふん

秘源の詞 弄
の見こ
弄 藤葉ニあるす
ことよふれとくきく見るなり
四息不の屋うたに物屋しと安及ひぬいしかし
きんなりとのぬふ
院もいうう
朱雀を却とあきぬふとせ
の見こゝろいたてよ物志ぬふ
秘女二ヶ之夕霧乃心をうんとそといぬふ
入乃ヶよりさしつきよ
実 藤葉のヶ如事を夕霧よとはまほしき心にく先
女三ヶ乃さしつきよハなとのぬへ望
四心にいうものしぬふらん 花宴家ことをなりしくとの夕霧乃見すこ
女二ヶの四事ニつう云ふ如しかぬり
秘夕霧詞
私夕霧の源へ戸ぬふ
弄 藤葉ニあのまし夕きり如源へ戸ぬふ詞也 私源夕霧ニのぬふ也

ミやせ不ハことをなりし　弄夕霧詞
宮乃ゆゑをかけて
蔵葉の御事をハ夕霧ゆゑあるへ
いと法ましなし　見いして夕霧の蔵葉ゆゑをかけて見いぬを法
れなしたいへるかりと
ふりのまくらかりに
秘　源乃心之或院法ましたれ　源の心とこそ私生
の心ハ頭人なる也
ハれさうしらは
源乃ゆゑまうしこそは美見を無用ハ之
くて御法じよりの法とりもちそく
夕霧之御やせ不の法まし之
女ゆゑ乃心あさ記やうは
秘　我仕大臣も不寄し給く夕霧ハ頭人なれ
ハ我女宮乃御方の心あさ記なる屋し
と号行之弄

○愛蔵葉の御難は我ミ我仕ハ号ゆふ之
の日は昔の御心あまは
我仕大臣柏木の極りはとふらひゆふ之
弄　御やせ不の御とてその日之柏木乃ゆりなれハ兄弟の
人ミを我仕大臣も生経るとしゆふ之
これ之まを
秘　紅梅の大臣なと之　○愛紅梅以下乃人ミ之
時乃人のかやのまさり
秘　世ハ見らるゝ人とひとしきや
弄　時を知らる人の弘事なと此を誓ふすと之
宮ハうくそそそそてなんと
秘　此小野はすミかてゆふへきとも
おほしらはまゝ色けまと
秘　出家乃心さし之更
いとあらましきことも
蔵葉の出家し給ひん事を之朱雀乃くゝ作らるゝ也

けはあまるこそ海のうさ海は
秘出家まし
弄女三家はうちつき居はなり給ひんまとき
弄アマタトサマカウサマトハ女二の柏木の坂多雪はなりいき
行ひんまいけこ院もおほしめせいうしあるなき人は給へ
ろと申出されハ夕雪をいとしかは出家給へらすとも
私弄ノ坂ノ家で給ん奥ノ菓子地ニテきこしたり
さしはなく世をしてしらは
朱雀乃仰力のまし
三家おもしごと
女三家
やうしくあらうひ給ひんも
又藤家の出家ありていけとも
秘同しやうのまとも弄
世乃うきに法けく
秘人をて給へらすとも

河内根ノ地ニいふ心也朱雀院もの出家アリ女三家又おなし仰十海なれハ女二家乃同根になり給ひんをうめ行之

このうきたるの名をう
秘菓子地之夕雪乃まし之弄
うしあへハこ
物うんしきうまし
秘りやうのまは物いうんしあへらと之
さやうのまは乃やも守なるは
弄夕きりのまゆへは居はなり給なときこしあるんハ
よろしうすとも
私夕きりのまいとも実事のあり世はいふ法をしし
さて私の親切なるのやうのまは居はなり給と世のきこし
あらはは夕雪はあいうなくおもせんなりもあらしきす
なるへしこれほしなるなり
さりとて又あらハ出さく
秘夕きりのまし
朱雀の仰心のうちこ出るへらぬまなるる夕雪のまを
出るしかしらりこあらはとかし此気ぬへけれハ出るぬらし
其ゝ作る海也

秘 柏木のまゝを十分なるさうまゝこと 弄
一とゝろやハ世のもとさをを
○箋 落葉の御身ひとりはハうきうぬこ
女乃御心ひとりは
秘 うきまゝこと
君しらのきこてしさうを
秘 さあらう人ならこ
かりにさらましきまゝをを
秘 宮男の文なとりつき給うけしまゝこ 弄
右近少将をまゝ
秘 二人乃女房達こ
弄 落葉方の二人の女房こ
こつらの御心はい
秘 人とゝりかしくこたくまゝのれこもさもれほさぬとも
弄 人とゝけれこしをとりかしくこたてまゝのうはこつらハをとろ
ぬるこ号ぬふこ根下根乃心を何まゝにをうらぬこ

歌をふけぬへし
秘 時とりたりふ屋しれこ 弄
落葉方 乃ほりけし衣の煙まゝらまし里者ぬるこはなひすも
河 此御乃あさの山ほやく煙風をいこ号ぬるはるひきなり
帝王の崩しぬつるなれ昇霞なとくこ取こ
秘 此御の面を拈塩やくし此方を引かつるこやこ不の煙
れ加しおなしけりともなりたきとも 弄
御をさこやくの御
秘 自然髪をうき給なとしていとそこ
くもてさいうさんりしうは
花 人くのもてさいくを出りなるる無ひられなとせは中
くおこう御しくまゝくしう御屋しくきこを夕暮ハなるお人
きこをきしぬふましきれ御ほさハ中くほいのことを見
給ハねとこ
秘 女二宮乃御心こゝく皆心 結ひをしるをを心はかけ給
ハさらこ我身乃まゝにあるもなきもれなしましれこ

神女飛芳音歌曰
やまとへりのせみさきあまそてらもいなまきやちよりもまよ和と
一云水江浦嶋子ハ不知何許人蓋上古仙人也ハ傳記ハ延喜
廿年作之ニ七言二十日韻以三百八十字成篇名浦嶋子
傳記云
又丹後風土記曰早部首先祖名三箇川嶋子爲人姿
容秀美水江浦嶋子者也長谷朝倉宮天皇御世乗釣
舟云
箋曰此三書の御是本にもかれ候く古跡ニも一条文人ハ屋
里語てを見しに両つりして柳木もなく御母にしまなれ
浦嶋子の旧里に物まうし申しき之形見の玉手箱寄持の
れ合之 来の狗にあるわき御之とハつら比流語之
河 えもの見との生を傳にける時てまさくりなに入て侍り
けるそこにハありける下むかひして近ひてえん時にあんそて
あのうさしをきて侍にけるのあさ見と
ありつらされて日久しく傳くありし家にへらてつ

若とせとなるみこまなきくらとて
此てらま何よりハもんあの江の浦ゝ鳴ことを常居りせて
おもしきしほさた連ハ
秋 一条宮にわりし淀さたる之
在つと我ほさ仁て
弄 浦嶋子か心を合をうり
あるね寸後なり
秋 廿宮の志にしいやすさこくされんくもやつかりて これし
にをありぬ思ひけり
箋 浦嶋子に浮さうる流類なり
とのハひんしのたハの
秋 夕霧之
三条とのなりハ
秋 雲井にいさ之

なれかよおかしえめるまを
秘夕きりハ好姿なりまをいきてしぬふと
極ほりかるるまゝ
秘みと俄なる心をいてきわるとも
されと年へよけることを
秘年ころもおりしまと之さ海くいへり
く女乃ハ心極ハ語ハね
秘女二家のハ心極ハひなきまとハれ是ハさるとも
とてもかうてを家乃ハたゝまより
秘弟子池
ハまうけなとさ海かりく
秘服中なれハ嫁娶乃様式屋うかりくるとも事
見なし法里りぬるまゝより語く
夕きり蔵柴のハかへ
ハこてろさし海とよ
秘女物君の様

中くるらへりて
蔵柴ハ右へ立へりてと
なまことも多乃ゝめよ
秘女物のいふ之人ハ多乃ゝめにくゝよせハ意よりハ
てハ冷なし心之
あやしうなしハりきこてさせしよ
秘夕きり乃詞心ゆるさハ心とも
いて屋ゝていさハ
女物君乃詞
あゝ君とかく
秘我君之夕旁なさしていへり
まるとしてぬ世ゝる　青まぎ又
秘まぎ又之女物の様之女家乃ハ心も又夕きりの語も
ハ法連も一義之只夕旁の様にて一様とも今のまゝ
世ゝるらハ有しとも
○後夕旁の女物君ハ討して詞之間

いと却しうも有り
秘 如何君の心
まるさしてねいけり
秘 如何君乃頭之心ハまるさしてねこかくしけるへしし家をも
行所心ハまへハいまるさしてねまなれいけまるますへきと也
見ハ如何君の羽之夕雪の人ハもことなきてとのゆふ
返す之
如何頭之事の心をまきまへさしてねまいぬ家のよりかねぬ
あまりいたけまもことなるへきにもあらず夕雪の心もいと
却 批判いけれよりも定るしれ之又云まるさしてねい
夕雪乃羽よ有りて云とよりかねぬ心ハまへとハ夕雪の
さはん又如君にもも私事まるさしてねい夕雪の
語んで易笠乗
よりこゝよ却ましひとりしきく
くしミ一さ哉ある心之
これをいけまくようは

秘 宮乃所心之
ハかりに見えれたらよける
秘 さあらう人くもとも
山鳥の心ちう
何 有し 川乃山鳥ハ出てり其のなかしし類をたとりもねん 人丸
ひるハさくらうハまゝ山鳥乃行ける時うねそうなしき
秘 萬々雌雄一所に寝さる鳥之独宿のまゝをいへ里乗
うて乃ミことくいへハ
ひるおりてなるけれハ
何 面ハ遠なき屋なる心ん
私直面の心なるへし
くしいさしものひまをくにと
秘 わなとてきこてんとも
私只すうし有けれへと云愛なる屋し

竹
関の岩とハ
わきの岩戸
同ツ之右寺ニ
久里の岩戸ノ
同トヨメリ八雲
御抄ニ岩戸の
関トヨムハ元也
非関わくトモ六
夜の明くへ

久秀
うち見まいらすれバ中さうるさき名のよにひさしまいらせ関の(はざと)
秘 開乃岩をいさしう折とうり又ハ元め明るさま
まいり
帝 まことしますると(にあなた)わかれなりしよと兼又申りこ
かな語りあひはてさし向る之岩とやう乃岩戸に
篭 開乃岩戸ハわりこなた閉まりなふ事をとりまいら
関 小路にくハ障子の扉てありと夜ハあけこゆの戸あり
仍まいらしまいらすといつらん関の岩とハ打返をばとせ
なるらん
私もぞ乃あまいらすことをいかな尋して又さしまいらすとも
いらり
たんりし乃かへ
花散里之
一葉乃こやもとし
秘 花散里の初
大よの月りなとり

帝 政仕大臣魯之　花散里
御本すりアりれ
秘 花ちる里乃さ液之
暮りにも元人の
秘 久秀初人様ハいなとも手を渡承し
ここやまかいいと心つかう
秘 ここやまか不遠云進しとと
なかん捉乃ぎうしおことにと
久秀乃そうらにの路之あまなすきへハますこしぬつとハ
ねよへきよしの心ありこれらう之
まとまの心さしも
久さりも生路叱さしハすりしれ之
のまへしこなんかれにへしと
秘 女二の之
花やもまほかれをさハれハ何りハら句シキル関
生涙えんとふくおほきハ久さりの我すえなてかんたんと
いえん

こなるこゝろなるに
弄 何かこゝろなるに 如之文乃出家の心さし能もはく
なとにあら称と又君になりあらはしてはしたとや
不の遠云になりしかしと
私雲ゐ居と蔵葉とのあるん
けんぎんな進てを
河 嫌疑
秘 君になりぬいてをはしまなる為し
院乃まゝらせぬへしんにを
秘 源にをかくやぬふと
人のいはりまや此
秘 花ちる里の詞
三条の姫君の
秘 雲ゐ居之
のとやうになるいぬひて
久きりの年月 実 次人なりしま

雁うたけふ雪の路をなす
秘 夕雪乃詞
なとそうそれをもをろうにハ
雲ゐ居のまゝ
にありさ夜ともにても
秘 源乃にゝくをいつり
にくけにあきたしや
秘 人にあく心つく 弄 なるゝにしてあるよしとも
こゝろ見乃物しの
秘 はふ上之
このにゝのゝ心
秘 花蔵里之
物乃たゝしり
花蔵里乃詞
男の人目ゐきおほえ
我なるぬ君にゐぬ心ん

さくおしき事ハ院の
花これも花ちる里のうちあふ事也　院ハ源也
いさゝかあるくしき
秘 夕霧乃中将のこの語て源のゆるしへハさしかさねの事
ありけるも
さうけ人のめのうへとらぬ色ハ　河賢人も身上乃事能ハ云
さなん源ハよこ乃返々
花 夕きりの返答也
秘 夕霧の詞ありの巻にも此君の教訓也し也　弄
おまへにまちらせはへり　秘 源の御まへ也
かくいさらしやしくれと
落葉中　源の心
ねびまさりけへ給
弄 夕霧の容也
かかいとぬひとる人乃深ありしを見をす
いとる年ひくかずなとめくらぬ程よ色好をさよう盛

はゝ子なりけるを
此一段夕霧乃中なと源の物語也心也
日たけく段ハ
秘 三条家也
いにしへもかくしほらう
秘 雲居雁詞
私 秘 いにしへもことしらてなと心ことなるありしりならなといひなん
まろいひやう志ゞ侍
おほとのゝめへいなかをてんよりてとこらのめし
ゆ心とりおほにもけれを
秘 夕霧詞
めくたいさまり
秘 雲居雁詞
くゝ心おさなけりろかなし語へいにもやめなれく
秘 夕霧乃詞
私 詞にハあら次夕きりの心なりへしとめなれてと云あるく

こゝろかよこう
これよりの夕雰の詞
かうくしきけを
弄がうぐしき神くしき之
秘神くしき之
なよこといふう
秘雲ね厚遠云之
をいうよ其よねひ
秘真にと之 実
こまやかりましいて
夕雰之
ちくてよめ之給いさらや
夕雰詞
さそもちきりふくなる世を
秘雲ね厚の夕雰にもこゝもふ死給ひとの給へいち
きりふきさるよとりなしねふ之 実

にかりりうらはくへきよ見ぢ乃いうきハ
河日本紀ニ泉門ヨミトといへりけとそ五巻通はるん
或又黄泉ヨモツクニ 又泉津ヨモツヒラ 平坂ヨモツサカ 又泉守道者
さらいちさり
技世まくの奥なる爲し
ふうはくしう雖うしき
雲ね厚の心ハ海之 秘雲ね厚ハ心あさき人と之
なりさりことゝ給なる
花 夕雰乃心之
図 雲ね厚を夕雰乃こしらへるさもしるをなをさりまと
雲好厚乃苦つ心うつしき人なれいなごむ之夕
雰の心よいあらせ
なごん法より
河やかうこさつと云心之
和乃字之
秘女二字之
れもいとまり心をしそ
けふ毛乃返るよなきよと

秋 夕きりよわ女二ゑへにかゝさいらせられたりしと
見えたり 弄
時はけふ房のさいらさりける
花 雲好房乃まゝ
秋 雲好厂乃まゝ 夕雪のまゝしますなし
弄 夕雪雪まよりてねもまいらさりしと 但雲好房の
弄はくて強ゝて用

昔よわにゝあまゝ心さし乃
秋 夕雪乃詞
しきゝけしきゝ見し
秋 あなるこなるこよりけしきはしまゝ雲ね房一
人まゝ心をとめたりしまゝ
女こまさしもあらしとなん
弄 夕雪乃雲好厂はいたゝ見し比人ゝ乃也こまとゝんと

の心ありしを心法よく学ましたゝ貞心なりとゝりて
もとさしまゝ女こそ夫人嫁をすといへるもいふ夕
雪乃とくゝあらしとも
おほしまゝ心ましき人ゝ
秋 にまゝらのあるゝ
女もおもしろまゝを
雲好房の心
なよいたりにそともぬきゝ給へ
夕きりの出るにさ海之
雲ね房
なるゝ身をうらむるよりゝ松浦のあさ衣まなちやつこまし
河 松浦やをし海さ紀まあまりをしあまの袖うらぬれし
旅紗石引之
弄 夕雪乃まゝ 別ゝる人の行きをうらえよりハとゝ
海人の衣もなれたるを人は別るまゝする人を送
よりゝ君はなるんとよりゝ又云なるゝ身ゝ雲ね厂
自身ぬまんなるゝそりゝ心ん

秘 夏字二義あり なるも身とはなれたる人のつる花とうらんよりはいとゝ夕雲をさしていひ又の義は自身の事之なるといふ我身をいへるとうらみてあらんよりはさ海をもうへて色盛しと之 二義共に用ひ之

箋 説ニアリ 夕雲をうらんよりは中くに雲ね厂乃さ海をのへかやと之 又は雲ね厂の我身を云衣のなるは出ほるも心なるれは之

秘 うはし人すてい さも心うき 秘 夕雲詞

秘 川 所 無蓋之

夏雲 まりいし海乃あまのぬれ衣なれぬとてぬきうつてふなを

秘 夕雲をなまとく心ゆるすと云へも又と人や労へ ゆふへきう 始名をとり給ひん事はよりしすと 弄

箋 はなまぬとてい夕雲乃我身を云なれ衣と云ハこほ心なまは我をいとひてぬきうへ給ひうなるの心ゆほき

秘 名ゆふ立へけまと之

花 夕きり始道房之衣乃なるとは出ほまくゆまはまとハ

海くまをいへりされはとてとさゝぬきうへきゆをいいくゝたくゆふ屋きと也

私は箋下句の心給へうゝ次

うらいけそくなをくしや

秘 いけそくよりこゆへはよりうすと也 弄

箋 は一句は菓子地之衣へいけき出ゆふ心はかまてとあくとも陸地なきよし之

しこよは粧さしこもり

秘 一条之

花 女二衣はいまさぬりこめまさしこもりて出給はぬと也

私花鳥まは詞をいこな紙くしやしこにはとけり

先はなをくしきを粧さしこもりゆへうるこよこう 弄 鶯

まはい乃はありさ海にくあらへきまをかす

箋 常乃いはものこくと也

私常乃はありさ海にくはとゝ夕雲は出てうしぬふまてきなるいうゆまをあらへきやにけ作る四へけまを給へる

ぬはうまりと也

よりのきこえをも

●箋 外字ニ

通ひしるをも

●箋 植木乃後又人ハ見て結へき名乃ちりたるまニ

うるめしかけり人のゆかり

●箋 夕雲乃事ゆへ所息不ハ遊去あり(ツ)ゆるさ曲なく

号しこ結先ニ

秘 こやせ不夕雲のまをなけき結て俄になくなり結

し極りと也 実

あらかまほしく

●箋 夕雲ノ詞 一且(諸)二諸ニ于あまあまりなまと也

にさしか人心ら

●箋 先ハ下法ニ事物ニ云まくこ乃所詞之

けのぶこ乃ほれ

●箋 所(尾)注ニ不一用志まくこ

さらぬ人なく

秘 世方ハかく人乃さらまはなましなをしと夕雲ゆけき結

寿 けまさらぬ人なく成らるを女宮乃つゝ持しめすと

夕雲へいふ之 私寿ノ義徳へし

つゝき物りきこえ結とさこの

●箋 夕雲へノ人乃中也之

ふ心ハ又とき海ハ

●箋 夕雲詞之 かくにとト云ヨリ夕雲乃詞と云ハ 北之

又とき海とハ夕雲ハ世間普通乃人の心ハ(各)若別なり

寅 法うと也

あまる乃年月をも

●箋 上乃宮の所詞ハ所かくの程にとあしをうけて云

れらるこれは

●箋 宮乃所詞これとハ喪ノ中のまと夕雲の用格なき

也を指せ也

人のきくふりん

●箋 外字口惜まの所方ハ乱て乃不をハさてをきねと也

なとへは物を捨てしきなりしけるゝよりにとれし
○箋 偏と云和字服之善惡にかゝりて一偏なるハ強へ言さる
まこなきへ乃ゑしこを又男乃愁を法令乃きり
あるへきまこ
こ乃人をきめへ
実 わゐまし
けよとも学ふそまりけるを
秘 わゐの心之夕雪乃心をけよと呼ふ之ふたてまつるハ
女文乃まし
これより海さる
秘 此夕雪ほとなきへをも皆とりつぐへき心なるへし
とこ
いとういりんるなき
秘 夕雪詞花
何乃しけきに名にる
秘 むゝ鳥のたまし我名乃心をていへり 寿

○箋 心さまくおほしめしあるとてもに名をあけらるへきに
あらぬとも
心さしをあるき 関り
河 世中乃うきたいとよ男をなけいあき石とあまて成な
男をもてあるき 関にも入ぬへし 庭乃心乃さ海ほしさ
いとうたていかなれハ
夕雪乃心
いかきとり程なるいさるこき
河 人非木石皆有情 白氏文集今東万葉第十二磐城と
出ていかきとあり其此成ん 不動乃心
花 いかきハ木石乃たとへ程まされ里河海の磐城ハ羽敷
なるハさるまや
ちきりとなうてまこしなと呼ふ也
○箋 是ハ公界の人乃まこ之ふ事ハ夫を嫌て
厭却せるなれし却きを抱之もしは家もさ今 此歌まや
と夕雪乃学ぶんし 行之

三条乃君乃
雲居雁之
つき抄のおりて礼之
夕霧乃中将之
この君乃ことなり
秘 柏木之
ゆるさまほしき物をすると
藤葉のゆるさ十分ならすと柏木の思しまよし
いま藤葉れ心中まさ思出のふ之
よりかなとうしらふ
弄 万か岩まうらうけてまいると推しおもや
おりさへいと思ひうけまい
秘 御服乃中之
達い乃ゆましのるまま達り
箋 如りこ然よ為出有之
秘 つるの御方之 女房乃ゆるこ之 弄

ひとりおもては
弄 服忌乃具なといそてまほしからぬへたてくらう之
つうろかおもひ木丁
箋 香染ハ吉まさ服忌も用へき色之
こまかにまき見てぬ物
秘 鈍色なともしうね物之
六条のいねこきぬねあかほい
弄 浮腰の人乃衣裳にハ色なとかはるへしなし
たゝ礼
箋 かいねのうら取捨こきぬハ之大略うこき多と
云ハ御之
女木はくまさしけなく
花 女乃らゐはえうらふかと女木とはふ大和言色くまゝ
らの(へ)うしすう之
秘 こや女木えりすとめへは之
この人ひとりのこ
大和言之

致仕大臣

かくのミこと給へん
ミけるさけりぬへり
致仕大臣にハ雲ゐ居の君給ふ上へ夕霧れおほさるゝ
しんぬり物まゐらせて 弄 女御の御方する雲ゐ居の弄
れいの参らせ給ふハ
秘 雲ゐ居里にハ出さ給ひてゐの給ハさる之
弄 雲ゐ居里にハつゐにかたまふるまいめ参らせしも
となく女御乃御前にまゐらせる給ふ之
はまさるへくしの
秘 夕霧の詞
わさしらぬ御心乃せうとハ
秘 此句丈夫生後の詞之
えらなすさ一ゆしよ
箋と夜落葉の弄
何事そといとミあさきわいよけり
秘 雲ゐ居の返弄

なまめきて。
箋 あるに白そきうりてんわうへし
面目ありとハ
秘 思ふらの弄
かくるの御ゆゑへ屋
秘 夕霧乃詞
たち名の神しきとて
何ゆゑいりそいふる名の神しきさ 信濃なるきそちの橋ふみけし
弄 関川方
秘 川方よをよふへつるさらん
しことよ文ハよ
秘 女二宮之
いかなる人かやなる事
秘 心はそしなる事とこそ夕霧いなれ給ハさる事なき之
こゝろよのねいりそて
秘 まいえ方さらにめ給ひと之

りしこなる人にも
秋 おさなき人に
号はしてる祀を
君ならぬ在さい夕雰のうへ云ゐへとも何となりもしたんとも
はかくしきけゆ御ふく
秋 一条家へいきぐしてゆ給てハとも 弄
はかくしきい夕雰乃まをいふん夕雰うくぶしてのゐふ
いめ君を御ふへ
夕雰の三条へ法連てゆそとも
とも君乃御なしへまい
夕雰の姫君なしへゐふ雲ゐ居の心に似ゐふ
なしのゐふ号うるまなくとゐ心ゐ御ゐまなるへ
おとうるまを
秋 彼仕大臣之
主りしいさそも見給ひて
箋 雲ゐ居へ彼仕の教訓之郭余なるをしれやうとも

なの法ゐる号ふ心物をゐ御人ものを
箋 夕そりハ何とう分ゐ乃ゐへきとも
よしくいひやうとなるハ
既
箋 既よ名を見をしてゐ御こうくハ力なしそのすらそをこ
なされよともあらう彼仕大臣の往之
この宮は
秋 藤葉家之
義人かゐ君を
彼仕大臣乃六男ん系圖に義人かゐとアリ
彼仕大臣 ちきりあれや君を心にいとゞ物をそてあかれと物ふうめしとく
箋 彼仕より藤葉家へことよりくは家ハ我は奥ゐうきなり
ものたれハ柏木のまゝにあかれと物ハ又とハ雲ゐ居のまゝに
こうやしれ字之
秋 あかれとおもへハ柏木之こうやしとゞハ夕雰はなひさゐふ
ることにかゝに奥あるりをいふなれ給ひしきまとも
花鳥弄回之

枕

れえ物にしえなたし
秘はあらりをいえなれ行ましきまとも
弄 柏木乃ゆりのまをもきゆへり
箋 論ゆさ家なれいやなよ所ゆ心食ゆきこ
ていよ入ねゆ
秘 円外なきさ海こ
ゆりなきまら
秘 わねの刻
見遣ゆらよ
二海紫こ
ちんしきさ
秘 ちんしきい絵へらすと
こうへ物えをましゆは
秘 家乃作心こ
五海紫家
なよゆへゆよに粒なるぬ男日とへ元うしいい労ゆらしと元
箋 男乃粒なるねい悲しいもうしとも人ゆ労ゆきを理元
こ

秘 男日とゆをさ海くまゆ乃絵いゆしたらまうと
わねい人こと
箋 人わねこ
いはよわいよすらあら
秘 久雪乃ましますほとまとも
箋 人わねの久雪といいとこ又わねのあひゆこ
円外なと元
先もこゆ折あらりて元
いとしく心ゆらねゆけしきあくれまとい
箋 久雪のまこ家の作心とけるこき愁を云
私いとしくとい彼仕よりの文なとは蒲紫家いよく
とけるこ多へきれも
大夫乃君い
秘 雲ねゆ
おほしなけくまこ三けし
蒲紫の作心とけるこきれは久雪ねあくれまとひて雲ねゆ
へ無意なるこ

円侍の出け

花見光ハ女夕雪の号人し女巻に見えたり

秘 有典侍之し女巻に見えたり

見れをよとしもに

秘 雲ゐ房いはもしは内侍の出けをねたゝねふほとにしは

文乃ゐ事をきゝて雲ゐ房をとゝめつゝ

有典侍 今ならは身に出てれよし世乃うきを人のたゝあにもぬるを

秘 我身粉なるハ身のうへにもぬるを心ぬきを心ぬるをとゝ雲

ゐ房のゝあにぬるすとこ花

なほけやけしとゝ

秘 見てつゝしとゝ

河ゐチヤケシ

美 左宮之もとゝ心ふ義もあり又見てつゝしきこと

左雲ゐ房 人のゝのう紀をあかれとこしをも身にかへんとゝ故をもさしを

秘 我身ハ人のうへまゝ身にかへてハ忘れぬとゝ

美 雲ゐ房返答之人のうへ乃うきまゝハ哀とこれとも身に

かへんとゝ忘れぬをは内侍の所ハ身にかへて人のゝあにれ

にあるまをとゝあり 又大きさ乃人の世れ事ゐんとの

身にあるうきもこも内へし

義 凡り世乃人乃うへにう紀事を哀と忘れ通しをも

身にかへてまゝ我ハ忘れさりしを人の為にもぬるを

神なるとゝあるハ号持にかく号入られるまゝと感

しなるゝ

あれにまゝ

有ないしの出けをあかれとゝ

也しの所中にし

義 雲ゐ房を川ゝ丸て後仕の所事をかれし其にし

ものまゝ

ことあらためて後ハ

義 有裏葉より雲ゐ房をゆるし給ての後を云

この所をとゝ

雲ゐ房をとゝ

この君二郎君ハ見しの物をとゝ

秘花ちる星のはるこ
院(サン)もこなれ
源之
此はゆうしのまいいやうるなくとう
弄紫或アル語之巻ニ如此
箋蔵葉ニ云いとまくいふ心を之ゆ雲ゐ雨ゐ
しらせ文雲ゐ雨も一ゆる致仕大臣此事ありつるの
何とかとおほせきこくうけ紫或アル用格の筆法之
奇妙云々
秘例乃作者乃語之